

幾何学 II 演習問題解答 No.6 2019年11月20日

問題 24 (1) (No.4, 問題 19 の解答も参照のこと) P_1, P_2 を中心とする半径 1 の開円板 B_1, B_2 をとる. $\mathbb{R}^2 = M \cup (B_1 \cup B_2)$ である. また $M \cap (B_1 \cup B_2) = B_1^\times \cup B_2^\times$, ただし $B_1^\times = B_1 \setminus \{P_1\}, B_2^\times = B_2 \setminus \{P_2\}$. \mathbb{R}^2 の開被覆 $\{M, B_1 \cup B_2\}$ に対して Mayer-Vietoris 完全列を適用すると

$$\begin{aligned} 0 &\longrightarrow H^0(\mathbb{R}^2) \longrightarrow H^0(M) \oplus H^0(B_1 \cup B_2) \longrightarrow H^0(B_1^\times \cup B_2^\times) \longrightarrow \\ &\longrightarrow H^1(\mathbb{R}^2) \longrightarrow H^1(M) \oplus H^1(B_1 \cup B_2) \longrightarrow H^1(B_1^\times \cup B_2^\times) \longrightarrow \\ &\longrightarrow H^2(\mathbb{R}^2) \longrightarrow H^2(M) \oplus H^2(B_1 \cup B_2) \longrightarrow H^2(B_1^\times \cup B_2^\times) \longrightarrow 0 \end{aligned}$$

M は連結なので $H^0(M) \cong \mathbb{R}$. また B_i^\times は S^1 とホモトピー同値なので $H^1(B_i^\times) \cong \mathbb{R}$, $H^2(B_i^\times) \cong 0$. Poincaré の補題から $q = 1, 2$ に対し $H^q(\mathbb{R}^2) \cong H^q(B_1 \cup B_2) \cong 0$. 従って Mayer-Vietoris 完全列から $H^1(M) \rightarrow H^1(B_1^\times \cup B_2^\times) \cong \mathbb{R}^2$ は同型, また $H^2(M) \cong 0$ である.

コンパクト台のコホモロジーについての Mayer-Vietoris 完全列は

$$\begin{aligned} 0 &\longrightarrow H_c^0(B_1^\times \cup B_2^\times) \longrightarrow H_c^0(M) \oplus H_c^0(B_1 \cup B_2) \longrightarrow H_c^0(\mathbb{R}^2) \longrightarrow \\ &\longrightarrow H_c^1(B_1^\times \cup B_2^\times) \longrightarrow H_c^1(M) \oplus H_c^1(B_1 \cup B_2) \longrightarrow H_c^1(\mathbb{R}^2) \longrightarrow \\ &\longrightarrow H_c^2(B_1^\times \cup B_2^\times) \longrightarrow H_c^2(M) \oplus H_c^2(B_1 \cup B_2) \longrightarrow H_c^2(\mathbb{R}^2) \longrightarrow 0 \end{aligned}$$

である. $B_i^\times \cong S^1 \times \mathbb{R}$ ゆえ Poincaré の補題より $H_c^1(B_i^\times) \cong H_c^1(B_i) \cong \mathbb{R}$, $H_c^0(B_i^\times) = 0$. また同様に $H_c^2(\mathbb{R}^2) \cong H_c^2(B_i) \cong \mathbb{R}$, $q \neq 2$ に対して $H_c^q(\mathbb{R}^2) \cong H_c^q(B_i) \cong 0$. 従ってこの完全列は

$$\begin{aligned} 0 &\longrightarrow 0 \longrightarrow H_c^0(M) \oplus 0 \longrightarrow 0 \longrightarrow \\ &\longrightarrow H_c^1(B_1^\times \cup B_2^\times) \longrightarrow H_c^1(M) \oplus 0 \longrightarrow 0 \longrightarrow \\ &\longrightarrow H_c^2(B_1^\times \cup B_2^\times) \longrightarrow H_c^2(M) \oplus H_c^2(B_1 \cup B_2) \longrightarrow H_c^2(\mathbb{R}^2) \longrightarrow 0 \end{aligned}$$

このことから $H_c^0(M) \cong 0$, $\mathbb{R}^2 \cong H_c^1(B_1^\times \cup B_2^\times) \rightarrow H_c^1(M)$ は同型, $H_c^2(M) \cong \mathbb{R}$ が分かる. ($H_c^2(M)$ については最後の行の写像を詳しく見てもいいし, また短完全列 $0 \rightarrow A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow 0$ において $\dim B = \dim A + \dim C$ であることを用いてもよい.)

(2) (1) での計算より $H_c^1(B_1^\times \cup B_2^\times) \rightarrow H_c^1(M)$ は同型. 従って $H_c^1(M)$ の基底は $H_c^1(B_i^\times) \cong \mathbb{R}$ の基底の (包含写像 $B_i^\times \rightarrow M$ に関する) 押し出しとして得られる. Poincaré の補題での同型写像 $H^0(S^1) \xrightarrow{e_*} H_c^1(S^1 \times \mathbb{R}) \cong H_c^1(B_i^\times)$ の作り方から, $H_c^1(B_i^\times)$ の生成元として $\omega_i = e(r_i)dr_i$ の形のもの取れる. ただし r_i は P_i からの距離を与える関数で, $e(r)$ は $(0, 1)$ 上のコンパクト台の C^∞ 関数であって $\int_0^1 e(r)dr = 1$ を満たすもの.

一方 $H^1(M) \rightarrow H^1(B_1^\times \cup B_2^\times)$ も同型であることから, $\tau_i = d\theta_i$ が $H^1(M)$ の基底をなすことが分かる. ただし (r_i, θ_i) は P_i を中心とする極座標を表す. (θ_i は 1 価な

座標ではないが, $d\theta_i$ は P_i 以外の点で well-defined であり, $H^1(B_i^\times)$ の生成元となる. 具体的には $d\theta_1 = \frac{xdy-ydx}{x^2+y^2}$, $d\theta_2 = \frac{(x-3)dy-ydx}{(x-3)^2+y^2}$.)

ここで $i \neq j$ ならば θ_i は ω_j の台の上で 1 価関数にとることができるので, Stokes の定理により

$$\int_M \tau_i \wedge \omega_j = \int_M d(\theta_i \wedge \omega_j) = 0.$$

ここで $\theta_i \wedge \omega_j$ がコンパクト台の 1-form であることを使った. 一方, $i = j$ ならば B_i の極座標で計算して

$$\int_M \tau_i \wedge \omega_i = \int_{(r_i, \theta_i) \in (0,1) \times [0,2\pi]} d\theta_i \wedge e(r_i) dr_i = -2\pi$$

ただし M には標準的な向きを入れている.

別解: より一般に $\rho(\theta)$ を周期 2π のなめらかな周期関数で $\int_0^{2\pi} \rho(\theta) d\theta = 1$ を満たすものとして $\tau_i = \rho(\theta_i) d\theta_i$ と取ってもよい. このときは ρ の台をうまくとると $i \neq j$ のとき $\text{Supp } \tau_i \cap \text{Supp } \omega_j = \emptyset$ ゆえ $\tau_i \wedge \omega_j = 0$ となって明らかに積分はゼロ.

(3) S_i を P_i を中心とする半径 $1/2$ の円, $R_i = P_i + \mathbb{R}_{>0}(0,1)$ (P_i から y 軸の正の向きに向かう半直線) とする. $\omega_i = e(r_i) dr_i$ は上と同じものとし, $\tau_i = -\frac{1}{2\pi} d\theta_i$ と定義しなおすことにする. このとき (2) の計算から

$$\int_M \tau_i \wedge \omega_j = \delta_{i,j}.$$

次が成り立つことを証明したい.

$$\begin{aligned} \int_{S_i} \tau &= \int_M \tau \wedge \omega_i & \forall \tau \in H^1(M) \\ \int_{R_i} \omega &= \int_M \tau_i \wedge \omega & \forall \omega \in H_c^1(M) \end{aligned}$$

これは τ または ω が基底のときにチェックすればよく,

$$\int_{S_i} \tau_j = \delta_{i,j} \quad \int_{R_i} \omega_j = \delta_{i,j}$$

であることから従う. (S_i には左回りの向き, R_i には上向きの向きをいれておく. また $i \neq j$ のとき $\int_{S_i} \tau_j = 0$ となることの証明には θ_j が S_i 上で一価であることに注意して Stokes の定理を使うとよい.)

注意: τ_i の代表元として, 上記別解にある通り $-\rho(\theta_i) d\theta_i$ の形のものをとると, R_i の十分小さい近傍に台を持つものが作れる. また $\omega_i = e(r_i) dr_i$ の代表元として S_i の十分小さい近傍に台を持つものがとれる. つまり τ_i, ω_i の台は各々 R_i, S_i を「近似」することができる.

(4) $\tau = \tau_1 - \tau_2 = \frac{1}{2\pi}(d\theta_2 - d\theta_1)$ が題意を満たすことを示そう. 境界付き多様体 $N \subset M$ を

$$N = \{(x, y) \in M : y \geq 0, 0 \leq x \leq 3\}$$

とおく. $\partial N = R_2 \cup R_1 \cup P_1 P_2$ である. Stokes の定理から任意の M 上のコンパクト台 closed 1-form ω に対して

$$\int_{\partial N} \omega = \int_N d\omega = 0$$

であるが, 左辺は

$$\int_{R_2} \omega - \int_{R_1} \omega + \int_{P_1 P_2} \omega = \int_M \tau_2 \wedge \omega - \int_M \tau_1 \wedge \omega + \int_{P_1 P_2} \omega$$

に等しい. 従って

$$\int_{P_1 P_2} \omega = \int_M (\tau_1 - \tau_2) \wedge \omega = \int_M \tau \wedge \omega.$$

別解: 基底に対する値 $\int_{P_1 P_2} \omega_i$ を計算して τ を求めてもよい. つまり

$$\int_{P_1 P_2} \omega_1 = 1, \quad \int_{P_1 P_2} \omega_2 = -1$$

なので $\tau = \tau_1 - \tau_2$ ととればよいことが分かる.

問題 25 略. 例えば, 河田敬義「ホモロジー代数」p.16 を参照せよ.

問題 26 次を示せばよい. $\omega \in \Omega^{n-k}(M), \sigma \in \Omega_c^{k+1}(M \times \mathbb{R})$ に対して,

$$\int_{M \times \mathbb{R}} \sigma \wedge \pi^* \omega = \int_M \pi_* \sigma \wedge \omega$$

これは M の局所座標 $\{x_i\}$ をとって確かめられる. 実際, M の座標近傍 $(U, \{x_1, \dots, x_n\})$ において

$$\begin{aligned} \sigma &= \sum_I f_I(x, t) dx_I + \sum_J g_J(x, t) dt \wedge dx_J \\ \omega &= \sum_I h_I(x) dx_I \end{aligned}$$

とかくとき

$$\pi_* \sigma = \sum_I \left(\int_{-\infty}^{\infty} g_I(x, t) dt \right) dx_I$$

であるから,

$$\begin{aligned} \int_{U \times \mathbb{R}} \sigma \wedge \pi^* \omega &= \sum_{I, J} \int_{U \times \mathbb{R}} g_I(x, t) h_J(x) dt \wedge dx_I \wedge dx_J \\ \int_U \pi_* \sigma \wedge \omega &= \sum_{I, J} \int_U \left(\int_{-\infty}^{\infty} g_I(x, t) dt \right) h_J(x) dx_I \wedge dx_J \end{aligned}$$

Fubini の定理よりこれらは等しい. (ここでは $T_{(x,t)}(M \times \mathbb{R})$ の向きを $T_x M$ の oriented basis $\{v_1, \dots, v_n\}$ を用いて, $\{\frac{\partial}{\partial t}, v_1, \dots, v_n\}$ で入れている. 向きに入れ方によっては符号だけずれる.)

一般の場合は座標近傍で M を覆い, 付随する 1 の分割を使って, 座標近傍上の積分に帰着する.

問題 22 解答 No.5 を参照せよ.